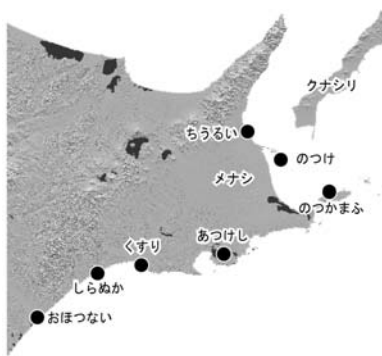


クナシリ・メナシの戦い(2)

はじめに

今回も、新井田孫三郎が残した「寛政蝦夷乱取調日記」からの紹介です。「ちうるい」(現標津郡標津町忠類)でアイヌ民族の襲撃を受けた飛騨屋の船「大通丸」に乗船し、かろうじて生き延びることのできた水主(船員)に対し、閏6月15日に「しらぬか」運上屋で行った取り調べの「口書」(事件の供述)についてです。5月13日に襲撃を受け、「ちうるい」の長人ホロイメキの子供セントキに助けられた、その後の状況を見てゆきます。



夷小屋へ

喉が渇いたので水を乞うと、もつ少し行つてからと言われ、しばらく連れられてから水を帆立貝で三杯吞ませてくれました。そこから夷小屋へ行き、粥を二杯食べさせてくれました。

その後、強い寒気を感じたので彼らに話してみると、それまで何も無かつたのに、今なぜそのようなつたのかと言つので、私は、これほどの世話になつて安堵したので、このようになつたのだと言いました。彼らは熊の皮を敷き、蒲団を掛けてくれたので、そこに臥してみると、全身が大変痛み、難儀いたしました。

セントキは、「ここに居てはクナシリ(国後)の「夷」とも」が来て面倒なことになるので、「惣長人」方へ行くべきと言われませんが、私は痛みが強く参りかねますと言いました。それならば、

明朝早々船に乗せてゆくからとセントキは帰りました。

長人「ホロイメキ」妾(第二夫人)の家へ

そして翌朝、彼らは長人妾の小屋に舟で連れて行き、蒲団を敷き「夜着」を掛けてくれ、セントキが介抱してくれました。同日の十七日昼頃に、クナシリの長人「三吉」の子「ホニシアイ又」と弟「モシリハ(ク)」ら仲間大勢が舟五艘で来て、小屋の内に少し入り、私を殺さんと騒いでいましたが、「酋長ホロイメキ」は私の枕元に居て、セントキと私の弟の両人は彼の前に立ち、「ツクナイ」(賠償の物品)を出すことで執り鎮めました。

さて私については、5月16日から25日までの間、「ちうるい」長人妾の小屋でセントキの介抱になっていました。同日「のつかまふ」(現根室市街地近く)の長

「シヨノン」に預けられる

人「シヨノン」がメナシ(自梨地方)より帰られ、「ちうるい酋長方」へも立ち寄り、すぐに私の居る小屋にて私の傷を負っている様子を見て涙を流され、「夷にても」助かり難き傷によくぞ助かりましたと述べ、「これより「のつかまふ」へお連れしましょうと言ひ、セントキに「エモシ」(短刀)一振りを差し出しました。

「のつかまふ」から「あつし」・「おほつない」へ

5月27日「のつかまふ」へ行き、「シヨノン」方に居りました。4、5日過ぎ、「ちうるい」より「シヨノン」が帰りました。幸い「あつし」(厚岸)の小使「シモチ」と「参合」・「シモチ」が言つには、態々「立舟」致さなくても、「我等」の舟へ乗つてはどうかと「シヨノン」に聞くと、納得の上「同人子供カネマキとウタシ壹人」を添えて、「シヤモ居處」何れ迄も送り届けるよう申し付けました。小使

「ノチクサ」方からも「子供壹人」添えて6月7日に出舟し、「あつし」へ13日に着き、運上屋に居たところ、「あつし」の長人達が、「(この度の) お出迎えに行くとこの事で、私も同船させてもらいました。「おほつない」(現十勝郡浦幌町大津)で(鎮撫軍新井田孫三郎一行と) お目に掛かり、セントキや長人らからの「手印」(アイヌの人々にとって、約束の証拠となす品)9品を差し出しました。

なお、庄蔵の「疵」は、鏝の疵が顔に五ヶ所、目の上より鼻へかけ大疵、手の内一ヶ所、腰に二ヶ所で、矢の疵は右の五指に一ヶ所、同二の腕に一ヶ所あり、「都合疵拾壹ヶ所」と記されています。次回は、アイヌ側の証言です。

【お詫びします】

前号地図中に「ちうるい」とあるのは、「おほつない」の誤りでした。訂正させていただきます。